

## 終末期患者紙上事例における看護学生のトータルペインへの理解

礒本 暁子\*

新見公立大学看護学部

(2014年11月19日受理)

成人看護学援助論の終末期患者紙上事例グループワーク演習における学生のトータルペイン（相互に影響し合う身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな4つの側面を持つ苦痛）への理解を明らかにする目的で、2013年度成人看護学援助論Bを受講した看護学部2年生のグループワーク演習の記述の分析を行った。結果、「痛い」など、患者の身体的苦痛は学生のグループ間の分類に差が少なかった。一方、「本来なら嫁があれこれ世話をするのが本当なのに・・・」等の記述は、グループ間で分類に差があり、4つの全ての苦痛に分類が分かれる結果となった。演習を通して、苦痛を分類することの難しさからそれぞれの苦痛が相互に影響しあっている事への学生の理解が深まっていた。また、学生あるいは患者個人々の意味づけによってアセスメントが変化することへの気づきがあった。よって終末期紙上事例を用いたグループワークはトータルペイン理解への有用性があると考えられる。一方、限られた授業時間の中で、人生の終焉を迎える方々への援助を学ぶには限界があり、講義の枠を越えた総合的な学習の工夫の必要性がある。

(キーワード) 終末期患者, トータルペイン, 演習

### はじめに

トータルペインとは、相互に影響し合う身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな4つの側面を持つ苦痛といわれている<sup>1)</sup>。トータルペインには、緩和ケアによって苦痛を和らげ、生活の質を改善する関わりが必要とされている。緩和ケアは、生命を脅かす疾患と診断された時期から行われるが、終末期においては生活の質を向上させる上でより必要となる。施設で終末期を迎える患者は多く<sup>2)</sup>、多死社会を迎えつつある現在、今後もこの状況は継続すると予測される。小池ら<sup>3)</sup>は看護系大学卒業看護師が卒後1年間に直面した困難のひとつに、終末期患者の看護における自己の知識、経験不足により看護の実施が困難であることを明らかにしている。看護学実習において終末期患者の実習を体験する学生は限定されており、終末期における今後の教育上の課題と教育内容の検討資料とする。

### 1 研究目的

成人看護学援助論の終末期患者紙上事例グループワーク演習における学生のトータルペインへの理解を明らかにする。

### II 成人看護学援助論B(慢性期・終末期)における本演習の位置づけ

成人看護学援助論は3つの授業科目で構成され、成人看護学援助論A(急性期)2単位60時間、成人看護学援助論B(慢性期・終末期)2単位60時間、成人看護学援助論C1単位30時間である。

成人看護学援助論B(慢性期・終末期)2単位60時間は、5つの単元がありその内の1単元5コマ10時間で終末期の患者の看護の教授を行っている。教授内容は、ターミナルケア・緩和ケアの考え方、治療期から終末期における緩和ケアへのギアチェンジ、終末期にある人とその家族の特徴、緩和ケアで用いられる看護介入(症状マネジメント)、終末期にある人のトータルペインについてである。本演習は、終末期にある人の身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな苦痛についての教授を終えた後に、事例を提示しグループワークを実施するものである。

単元の目標は、終末期にある患者と家族の特徴について理解できることとしている。演習の目標は、身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな苦痛はわかちがたく関連していることを理解する。看護師はひとつの言葉だけにとらわれることなく、患者自身の思いを表出できるように訴えに耳を傾ける姿勢が重要であることを理解することとしている。

\*連絡先：礒本暁子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

III 演習内容

成人看護学援助論 B 単元 5 の 1 コマの 90 分授業内においてグループワーク演習を行った。演習に用いた終末期患者紙上事例は、研究者が関わった 40 歳代の女性乳がん終末期患者の体験を、個人が特定されない形で書き起こして提示した。まず、個々人で記述内容の分析を行い、自分自身のトータルペインに関するとらえ方の理解をうながした。その後、1 グループ 4 名程度全 13 グループで意見交換、事例の記述内容の検討を行い、記述内容が身体的苦痛・心理的苦痛・社会的苦痛・スピリチュアルペインのいずれにあたるかを分類するグループワークを行った。また、授業後に感想を自由に記述してもらった。

提示事例：

患者の状況：40 代の女性患者。専業主婦。子ども二人とご主人と同居。近くに義父母が住んでいます。乳がんの手術と手術後の化学療法やホルモン療法を終え、数年後。腰が痛くて受診したところ、骨に転移していることがわかりました。通院で化学療法を続けていますが、痛みにはあまり変化がなく、鎮痛剤を使用しながらの生活を送っています。

患者の訴え：「家事は続けてすると痛いしだるいので、休み休みしています」「痛み止めの量が増えてきているのに、これ以上効かなくなったら困ります」「買い物は義父母にお願いしています」「朝食は簡単なものを作ればよいが、夕食はそうはいかないので義母がつくって持ってきてくれます」「昼食も持ってきてくれます」「受診も一人では無理なので、義父が送迎をしてくれています」「本来なら嫁があればこれとお世話をするのが本当なのに・・・」  
「入浴は、とても時間がかかるので家族がいない時間に、シャワーをあびています。元気なときには毎日入浴していたけれど、今は身体と髪を洗うのを一度にすることができないんです」「再発後の化学療法を始めてからは、子ども達の参観日にも運動会にも行けなくなりました」「いったいつまでこんな生活がつづくのだろう」「抗がん剤は高いし、家事もろくにできないし迷惑をかけてばかりで辛いです」

IV 研究方法

1. 研究対象

A 大学看護学部看護学科 2 年次生 64 名

2. 調査期間

2014 年 2 月

3. 分析方法

提示された紙上事例に関する記述内容が、身体的苦痛・心理的苦痛・社会的苦痛・スピリチュアルペインの

いずれに分類されたかについてはそれぞれに単純集計を行った。自由記載の内容は、トータルペインへの理解が記述された内容を抽出し、意味や内容が一つのまとまりになるように区切り、類似性や相違性を吟味しながら内容分析を行った。

4. 倫理的配慮

研究の趣旨を口頭で説明し、匿名性の保証、研究参加の可否による成績評価への影響は生じないこと、記録内容の分析拒否の申し出を受けていつでも分析対象から外すこと、データはすべてコード化し、個人が特定されないよう匿名性を保持すること、プライバシーの厳守、研究結果の公表等を説明し同意を得た。

V 結果

分析 A 大学看護学部の 2013 年度成人看護学援助論 B を受講した 2 年次生 64 名のうち、58 名 13 グループを分析対象とした。学生が行ったトータルペインの分析結果を表 1、感想から得られたトータルペインの理解の分析結果を表 2 に示す。

表 1 学生の行ったトータルペインの分析

事例の記述(記述数)	凡例 身体・身 精神・精 社会・社 スピリチュアル・ス											
	身	精	社	身・精	身・社	精・社	身・精・ス	精・ス	精・社・ス	身・精・ス	身・精・社・ス	
乳がんの手術と術後の化学療法やホルモン療法 (1)												1
腰が痛い (5)	5											
骨に転移 (2)		2										
痛みにはあまり変化がない (2)	2											
「家事は続けてすると痛いしだるいので、休み休みしています」	11			1								
「痛み止めの量が増えてきているのに、これ以上効かなくなったら困ります」 (13)	1	7		4	1							
「買い物は義父母にお願いしています」 (12)	1	1	4		2		3	1				
「朝食は簡単なものを作ればよいが夕食はそうはいかないので、義母がつくって持ってきてくれます」 (12)			5		2	1	2	1				1
「昼食も持ってきてくれます」 (12)			5		2	1	2	1				1
「受診も1人では無理なので義父が送迎してくれています」 (11)			4	1	2	1	2					1
「本来なら嫁があればこれとお世話をするのが本当なのに・・・」 (13)			3	1		1		2	3	1	2	
「入浴はとても時間がかかるので家族がいない時間に、シャワーをあびています。」 (9)	6		1	1								1
元気なときには毎日入浴していたけれど、今は身体と髪を洗うのを一度にすることが出来ないんです」 (13)	9	1		2								1
「再発後の化学療法を始めてからは、子ども達の参観日にも運動会にも行けなかった」 (13)			3	1	2	3	1	1	1	1		
「いったいつまでこんな生活がつづくのだろう」 (12)			3					5	3			
「抗がん剤は高い」 (10)			10									
「家事もろくにできないし迷惑をかけてばかりで辛いです」 (13)	6							4	3			

表2 トータルペインの理解

様々な苦痛があり分類が難しく、単純に分けられない
身体・精神・社会・スピリチュアルはそれぞれ密接に関連している
終末期患者は様々な苦痛・トータルペインを抱えている
スピリチュアルペインとは何かとその分類が難しかった
自分の生きている意味(スピリチュアリティ)を考えさせられた
個々人によって解釈が違い、様々な視点から見る必要がある
患者の声に耳を傾けることが大切

提示された事例に関する記述内容からの苦痛の抽出において、患者の置かれた状況を説明した情報の記述からは、抽出数が少ない結果となった。患者の置かれた状況を説明した情報の記述のうち、乳がんの手術と術後の化学療法やホルモン療法を行っているという記述を抽出したグループは1グループのみであった。また、骨に転移している、痛みあまり変化がないという状況についてはそれぞれに2グループが抽出を行った。腰が痛いという記述は、5グループが抽出しており、身体的苦痛としての分類に集中していた。一方、「患者の訴え」からは、様々な苦痛の抽出がなされていた。分類にばらつきが無かったのは「抗がん剤は高い」の記述で、10グループが社会的苦痛として分類した。比較的分類にばらつきが少なかった記述として、「家事は続けてすると痛いしだるいので・・・」は、13グループの内11グループが身体的苦痛に分類、1グループが身体的・社会的苦痛とした。「痛み止めの量が増えて・・・これ以上効かなくなったら・・・」は、身体的苦痛として分類したグループが7、身体的・精神的苦痛として分類したグループが4であった。それ以外の記述は、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルあるいは、2以上の苦痛が関連している苦痛としてばらつきのある分類がなされる結果となった。

トータルペインの理解内容では、様々な苦痛があり分類が難しく単純に分けられない、身体・精神・社会・スピリチュアルはそれぞれ密接に関連している、スピリチュアルペインとは何かとその分類が難しかった、学生内でも個々人によって解釈が違い様々な視点から見る必要がある、患者の声に耳を傾けることが大切といった理解が得られた。

## VI 考察

### 1. 患者の置かれた状況からのアセスメント

患者の置かれた状況を説明した情報の記述からは、抽出が少ない結果となった。学生は、がんの罹患、再発や転移により治癒が望めない状況から必然的に生じる身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面への影響を予測しなかったものと考え。がん患者意識調査2010年<sup>4)</sup>では、がんの治療を通しての悩みとして「落ち込みや不安、恐怖などの精神的なこと」「痛み・副作用・後遺症などの身体的苦痛」「これからの生き方・生きる意味などに

関すること」「収入・治療費、将来への蓄えなどの経済的なこと」が上位4項目にあげられており、がん罹患した患者が求めている緩和ケアや経済的な側面に対する理解を促す学習が必要と考える。現在、成人看護学援助論の講義において、がん看護に対する系統的な単元は設けておらず、疾患別看護のなかで個別に教授を行っている。患者の状況をアセスメントし、潜在する問題を予測するアセスメント力の向上を目指した系統的ながん看護の教授内容や方法の検討が今後の課題である。

### 2. 患者の訴えからのアセスメント

「患者の訴え」からは、様々な苦痛の抽出がなされていた。「抗がん剤は高い」は、社会的苦痛として分類されていたが、家族に経済的負担をかけることから精神的苦痛が生じる可能性もある。この紙上事例の記述内容では社会的な苦痛として理解するのが妥当である。しかし、実践場面においては、患者との関わりの中で患者の体験している苦痛の訴えに耳を傾けることで、社会的(経済的)な苦痛が精神的な苦痛と関連していることが明らかになる場合もあり、アセスメントの視点が多面的になるように演習時の発問の工夫を検討する必要がある。比較的分類にばらつきが少なかった記述として、「家事は続けてすると痛いしだるいので・・・」は、13グループの内11グループが身体的苦痛に分類、1グループが身体的・社会的苦痛とした。「家事は続けてすると痛いしだるいので・・・」の訴えは、身体的な痛みと家事役割について並列で記述されていたにもかかわらず、身体的な苦痛に分類が集中したことから、役割や課題を果たせないことから生じる苦痛についてもアセスメント視点を広げられるように、成人期の役割や発達課題の理解についての教授内容や方法の検討を要する。それ以外の記述は、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルあるいは、2つ以上の苦痛が関連している苦痛としてばらつきのある分類がなされる結果となった。ばらつきがある項目については、結果そのままを学生にフィードバックすることによって、4つの苦痛は互いに影響し合っていること、全体としての苦痛が患者のトータルペインであることへの理解に繋がると考える。

### 3. 演習を通してのトータルペインの理解

演習を通して、患者の苦痛を分類することの難しさから、それぞれの苦痛が相互に影響しあっている事への理解が深まり、トータルペインの構造への理解が深まっていた。また、個人ワークの後にグループメンバー間での討議を行うことで、患者の訴えがどのような苦痛を示しているのかに対するアセスメントが、学生あるいは患者個々人の苦痛の意味づけによって変化することへの気づきがあった。学生間の意味づけの違いから、全く同じ表

現の訴えであっても、看護者間でのアセスメントに違いが生じることへの気づきにつながったと思われる。さらに、患者は単純に分けられない様々な苦痛を抱えており、個々の患者自身の意味づけに気をつけながら、患者の訴えに耳を傾けることの重要性への気づきにつながったと思われる。このことから、本演習の目標である身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな苦痛はわかちがたく関連していることへの理解、看護者はひとつの言葉だけにとらわれることなく、患者自身の思いを表出できるように訴えに耳を傾ける姿勢の重要性の理解につながったと考える。

以上より、終末期紙上事例を用いたグループワークはトータルペイン理解への有用性があると考ええる。一方、2年次後期開講の終末期の単元は、5コマ10時間で構成されており、限られた授業時間の中で、人生の終焉を迎える方々への援助を学ぶには限界がある。1年次からの教養教育や読書等を通して、死生観を養う等講義の枠を越えた総合的な学習の工夫の必要性がある。

## 文献

- 1) 嶺岸秀子, 千崎美登子編著: ナーシングプロフェッションシリーズ がん看護の実践-1, エンドオブライフのがん緩和ケアと看取り, 2-5, 医歯薬出版株式会社, 2008.
- 2) 宮下光令編: ナーシング・グラフィカ 成人看護学⑦ 緩和ケア, 23-25, メディカ出版, 2014.
- 3) 小池菜穂子, 萩原英子, 鈴木珠水他: 看護系大学卒業看護師が卒後1年間に直面した困難 成人看護学領域の視点から, 群馬パース大学紀要(13), 57-67, 2012.
- 4) 日本医療政策機構市民医療協議会. 患者が求めるがん対策 Vol.2: がん患者意識調査2010年. <http://ganseisaku.net/pdf/inquest/20110509.pdf> (アクセス: 2014年9月).